豊田 ひさき著
『授業力アップへの挑戦12 集団思考の授業
づくりと発問力・理論編』
的場 正美（名古屋大学）

1. 発問という縄糸

豊田氏が学校の教育実践への一貫した姿勢のもと、かつ学識の広さをもった個性の人であるように、本書もまた発問を縄糸とし、授業、教師、子ども、歴史を縄糸にして編まれた個性的な著作である。

豊田氏が発表した多くの実践者の中から、まず、1918年（大正7年）より独自教育と相互教育を実践した山田兵一の事例を取り上げてみよう。木下竹次主事の指導のもとに奈良女子高等師範大学附属小学校において、山路訓導は教室の入り口に「参観謝絶」の札を付け、「教師の方から絶対先に教えて、子どもが教えてください」と要求してきたはじめて教育という構法で、「皆さん、教わりたいこと、たずねたいことがあるのほらとしでお出で」。

今日からは一人ひとりにお教えすることにしましょう」と宣言（同書104頁）したという。突然の宣言

に戸惑いを見せた子どもたちも、時が経つにつれて、質問を持って来て、授業の中ほどには山路訓導は子どもたちに問われ、棍子でも口を開かなかった子どもたちが「先生、先生」と連呼して押し掛けてくる様が描かれている（事例1）。山路訓導は、今までは教師がお聴立てしていたものを与えてきた

が、「教師の頭で勝手に択配した系統や見渡し」ではなく、「児童の要求に適応した系統」が通の教材

の見渡しや系統であることを悟った（同書105頁、事例2）。このような独自学習が二週間ほど続いた

後に、子どもたちの自発的な読み方の時間において、「大空」を「タイクウ」と読んではしまったこと

をめぐるエピソードが一種の授業記録として紹介されている。「大空」は「タイクウ」ではなく、「オオ

ゾラ」となり、5名の子どもが指摘する。「いや、オオゾラでいい」「辞書を引いたら」「引いた、オオゾラ書いてある」「いや、タイクウとも書い

てある」と論議になる。この論議が堂々巡りしていることに気づいた子どもたちの教師に答えを求める

が、山路訓導は「そうした感じで読んでいるのならどちらもよい、人々の感じですからね」と答え

る。その後、口をつぐんで誰も何も言わないので、

教師が「どうする。すっかりわからないのか、何

でも聞きたいことがあったら」と質問すると、子ど

もたちは「いいえ、もう聞くことはありません」

「先生何でもたずねてください」という。そこで山

路訓導は「よし、では、気候によっても所をかへ
る…とは」とたずねる（事例3）。

この事例を豊田氏は次のように分析している。事

例1からは、従来やり方では発言しなかった子た

ちまで進んで尋ねに来る。これこそが合講学習であ

り、劣等生が生じない考えが見出される。事例2から

は、「子どもから」を柱にして教師と子どもの共同

作業によってその都度創り出していく新しいカ

リキュラム観の萌芽が窺われる。事例3からは

は、分かったと安心している子どもに、「教師が挑

発して、子どもの発表を呼び出す「煽り」とでも

呼ぶことのできる山路独創指導法がある。これ

は従来の「ゆうぶり」ということばでイメージさ

れている指導を超えている。

この実践事例は豊田氏が発表しているほんの1例

であるが、教師の発問は単なる技術ではなく、教科

観、指導観、カリキュラム観と深く結びついて展開

されていることが分かると同時に、かくも私たちの

先人は教育実践に思想性をもたせてきたのかと驚

く。

本書の随所が、発問という縄糸にして、先人とこ

れまで豊田氏が授業実践者との交流を通して得きた

授業論、指導観、教科観、思想を縄糸にして編纂
されている。

2. 本書の構成と内容

本書は次の6章から構成されている。

I. 集団思考を組織するタクト
II. 学力を保障する学習活動のつくり
III. 発問と「子どもから」の授業実践
IV. 校長が変われば授業も変わる
V. 発問と「ゆきぶり」論争
VI. 発問論の発展に関する実証的研究

Iは教師が集団思考を促進する授業を展開するための要点をまとめたものである。ここでは、子どもの個性的な違いが授業展開において具体的に発揮できるような学習活動のつくりの思想とヒントが述べられている。学習過程は子どもがある事柄について疑問心を起こす発疑とその疑問の解疑のサイクルを描く過程であると捉えられている。その背後にある思想も丁寧に解説されている。すなわち、見たもの、聞いたもの、触れたものそのものを自分に、実物に、書物に、学友に、人にお尋ねするという奈良女子附属小学校の思想が紹介されている。教師からの発問に答えることができた子と出来なかった子の間に、かわり合いの成立を求める大西光治の考え方や通常の唯一正答を求めて尋ねる発問とは異なり、「わからない」や「誤り」でも「対立・矛盾」の多様な思考でもよい、発問を求める吉本均の考えが紹介されている。

IIにおいては、分からない、出来ない子どもに寄り添うことが、授業実践では重要であり、教師の発問時この「わからない」ことや「まだかっこと」を出し合って考え合う場を創出する重要な契機となることが指摘されている。

IIIは、一人ひとりの子どもに確かな学力をつけられる教育実践を大正時代に展開された奈良女子高等師範大学附属小学校の池内と山路の3人の調教の実践を素材にして考察している。冒頭に取り上げた実践事例はその1つである。

IVは、日本教育学会編『教育学研究』に掲載された福井県三国町の三国尋常高等小学校における三好得恵の自発教育論を論じたものである。

Vは、発問と「ゆきぶり」の関係を「ゆきぶり」と「出口」論争を通して論じている。この分析を通して、小田氏は、出口論争の意味と今後の研究課題を示している。

VIは、発問に関する研究を歴史的に考察したものである。ルーヴるから始め、ミュンスターの教員養成所がオーフェンベルクやディースターヴェークに言及し、吉本均、大西光治、向山洋一、斎藤喜博の発問論を歴史的に位置づけている。

3. 本書の特徴と意義

第一の特徴は、発問が単なる技術論として論じられているだけでなく、子どもの人間形成の目的や教材の価値、授業展開など教育方法学の観点から論じているところにある。例えば、先に述べたように、学習過程を子どもがある事柄について疑問心を起こす（これを「疑問」呼んでいる）その疑問を解決するために仮説を立て、調べたり、試したりしながら解決する（これを「解疑」と呼んでいる）過程として、発問の視点から「発疑」から「解疑」の過程として再定義している。学習過程を子どもの視点から再定義するとそうなるのだと認めてできる。しかも、学習はこの「発疑」から「解疑」の過程の結果であり、副産物であるという奈良女子高等師範附属小学校の学習観を示すことによって、発問の問題は学習観と関連していることが理解できる記述になっている。子どもの発疑を起こさせるためには教師子どものも疑問に寄り添うことになる。そうすることによって教科書を教えるという考えから離れ、子どもの到達度にアプローチがあっても、授業を構想できるゆとりが生まれる。発問の問題は、教師の基本的態度を華で視野が広がっていく可能性と実際的な関係性を示したところに、本書の特徴がある。

第二の特徴は、先ずは発問を吉本均教授の教育学を基盤に、問い返しているところにある。別な表現をすれば、吉本の教授学は発問の視点からみると、先のように見てくることを示している。読者はこの着書を読むことが吉本学が見えた感覚を紡ぐことができる。そして、次に、これまでの東西の先行研究や教育心理学等分野からの発問研究など多くの主張に言及しながら、発問を学際的見ることで位置づけようとしている点に本書の特徴がある。スペンサー、ロヒョウ、オーフェンベルク、ディンター、ディースターヴェーク、フィッチなどヨーロッパの研究者、植山栄次、及川又治、それに、吉
『大正自由教育期における社会系教科授業改革の研究』

著者: 永田 忠道

1. はじめに
著者の永田忠道氏は、2005年に広島大学において博士（教育学）の学位を取得された。本書は、その博士論文を日本学術振興会の科学研究費補助金の助成により出版されたもので、永田氏は修士論文「大正自由教育期における地理教育実践の研究」をベースとして、その後私立高校での世界史・日本史担当という経験や、国立教育研究所地域・歴史教育研究室研究員という経験を踏まえている。本书のテーマである「大正自由教育期の社会系教科授業改革の研究」にとどまり着いたという。

2. 本書の構成と特色
序章 本研究の意義と方法
第一章 社会系教科の展開と授業改革の類型
　第一節 明治期の社会系教科の展開
　第二節 明治期の社会系教科授業の展開と課題
第三章 大正自由教育期の社会系教科授業改革の類型化
　第一項 類型化の指標
　第二項 授業改革の四類型
第二章 現実主義授業方法改善による社会系教科授業改革
　第一節 地理授業改革（東京高等師範附小）
　第二節 歴史授業改革（同上）
　第三節 修身授業改革（同上）
　第四節 国定教科書の学習化による社会系教科授業改革の意義と限界
第三章 理想主義授業方法改善による社会系教科授業改革
　第一節 地理授業改革（千葉師範学校附小）
　第二節 歴史授業改革（同上）
　第三節 修身授業改革（千葉師範附小）
　第四節 カリキュラム開発志向による社会系教科授業改革の意義
第四章 現実主義授業内容改善による社会系教科授業改革
　第一節 地理授業改革（明石女師附小）
　第二節 歴史授業改革（奈良女高師附小）
　第三節 修身授業改革（富士小）
　第四節 カリキュラム開発試行による社会系教科授業改革の意義
第五章 理想主義授業内容改善による社会系教科授業改革
　第一節 成徳小学校における文科の実践
　第二節 長野師範学校附属小学校における研究学級の実践
　第三節 カリキュラム開発試行による社会系教科授業改革の意義
第六章 終章 大正自由教育期における社会系教科授業改革の過程と到達点
以上の目次構成からもうかがえるように、本書は